第２学年７組　道徳科学習指導案

１　主題　「他者を思いやって行動する」　　内容項目 B-6「思いやり・感謝」
（出典：「地図のある手紙」　新あすをいきる２　日本文教出版）

２　具体的構想

（１）主題について

「思いやり」とは、自分とは異なる他者の状況や、その人にとって最適だと思うこと考え行動することであり､様々な人間関係を築きながら､お互いがより豊かな人生を送っていくために必要不可欠なものである。他者に対して思いやりのある行動をするためには、まずはその人のことを理解し、意見や考えを尊重することが大切である。その際には、相手の喜びを自分の喜びとして感じたり、相手の悲しみを自分の悲しみとして感じたりといったように、他者のことを十分に考えた上で、相手が最も望んでいることを予測し、行動に移すことが重要である。ただし､むやみに行動を起こすことがすべてではなく､遠くから敢えて見守ったり、黙って何もしなかったりすることも思いやりのかたちだと言える。また､「思いやり」の対象は、友達や家族等の身近な存在から、世界中の出会ったことがない人まで無限であり、自分が経験した思いやりの精神を、新たな他者へと広げていくことにも大きな価値がある。そのような経験を増やしていきながら、思いやりの対象を、目の前にいる人だけではなく、遠く離れた人や長い間会っていない人、さらには出会ったこともない人にまで広げていくことは、非常に意義深い。

（２）生徒の学習状況

本学級の生徒に、事前のアンケートでは「相手の喜びや悲しみを、自分の喜びや悲しみとして感じた経験はありますか」という質問に対し、86％の生徒が「はい」と答え、「自分が感じた喜びや悲しみを、相手に分かってもらえたと思った経験はありますか」という質問に対しては、85％の生徒が「はい」と答えた。しかし、その場面を問うと、「他の部活の友達が試合に勝った時自分も嬉しくなった」「自分の喜びを両親に話した時一緒に喜んでくれた」等、思いやりの相手が身近な相手のみであったが､「思いやりとはどんなことだと思いますか」という問いに対しては、「人のことを思って行動すること」「相手が知らない人でもみんなが生活しやすく、気持ちよく日々を過ごすためのもの」「差別などをしないで誰でも普通に接すること」等、思いやりの対象を比較的広く考えることができていた。この結果からは、思いやりに対する漠然としたイメージは持つことができているが、なかなか日常生活の中と結びついていないことが分かる。この原因としては、日頃目の前にいる人以外の人に目を向けられていないことが考えられる。また、身近な人以外から思いやりをもった行動をとられた経験が乏しかったり、経験をしていてもそこまで考えて受け止めていなかったりするのではないかと予測出来る。

（３）資料「地図のある手紙」について

この資料は、郵便局員をしている源さんが、両親を幼くして亡くし、今は東京で暮らしている一郎のことを思いやり、一郎から亡き父と母に宛てられた手紙を吹雪の中お墓まで届け、お墓の前で読み上げるという物語である。普通、亡くなった人宛の手紙は読まずに差出人に返すが、源さんは一郎の気持ちを考え、想いを行動に移す。この源さんの行動からは、大きな覚悟と一郎への愛情が感じられる。また、手紙の内容も様々な解釈をすることができる。両親を亡くすという深い悲しみを抱えているにもかかわらず、文面は明るく前向きな内容であり、最後は「さようなら」で終わる。他人同士であり、かつ長い間会っていなかった二人であったが、源さんはすぐ一郎のために行動を起こす。この源さんの姿について考えさせることで、目の前にいる相手だけを大事にするのではなく、時間や距離を超えても他者と関わりをもち続けることの大切さに迫らせたい。

（４）本時のねらい

○　人は長い間会っていなかったり距離が離れていたりしたとしても、心の深いところで人と繋がることができるということに気づかせた上で、目の前にいない他者に対しても思いやりをもった行動をとろうとする意欲を育むことができる。

３　本時

（１）日時　平成３０年１１月９日（金）５校時　　（２）場所　２年７組　教室

（３）展開

段階	教師の発問と予想される生徒の考え	教　師　の　支　援	評価の観点
導入 (5)	１、思いやりについての友達の考えを知る。 （１）アンケート結果を発表する。 ２、めあてを確認する。 **めあて：「人を思いやる」とはどういうことかについて考えを深めよう。** ３、資料をもとに、思いやりについて考える。	○思いやりについての友達の認識を知るために、視聴覚機器を使ってアンケート結果を提示する。 ○源さんの気持ちに迫りやすくするために、源さんと一郎についての情報を整理したり、二人の関係を全体で確認したりする。	
展開 前段 (20)	（１）資料「地図のある手紙」をよむ。 （２）発問を個人で考える。 **●源さんは手紙を読み終わった後、家に帰りながらどんなことを考えるだろう。** ・一郎は本当に辛い思いをしながら頑張っているんだな。僕もしっかり仕事を頑張ろう。僕のした行動で、一郎が喜んでくれると良いな。 ・寒かったけど、ここに来て読むことで、天国の二人にも気持ちが届いただろう。今日ここに来て読んで良かった。 ・一郎はきっと一人で寂しい思いをしているだろう。両親は亡くなっているから、僕が一郎に手紙の返事を書こう。 ・これからも一郎のことを支えられる存在でいられたらいいな。もし一郎に時間ができたら、東京に会いに行きたい。 （３）ペアで意見交流を行う。 （４）全体で意見の交流をする。	○源さんの感情についてのみしか意見が出なかった場合は、具体的な源さんの今後の行動を考えさせるために「源さんはこのあと何か行動を起こすと思いますか」という補助発問を投げかけ、より深いところまで考えやすくする。 ○源さんの思いをより考えさせるために、発表した生徒には「何で？」「どういう意味？」と、質問で切り返していく。	
展開 後段 (15)	４、日常生活と繋げながら、思いやりについての考えを深める。 （１）発問について個人で考える。 **◎「思いやり」とは、どのようなものだと思いますか。** ・自己満足で終わるのではなく、相手のことをしっかりと考えた上で、最適な行動をすること。 ・目の前の相手と表面的に作るだけのものではなく、相手のことを本当に考えた上でできあがっていくもの。 （２）班で意見を出し合い、自分の意見を交流する。 （３）全体で意見を交流する。	○思いやりについての心の変化を感じさせるために、もう一度アンケート結果の内容に触れた上で、発問について考えさせる。 ○効果的な班交流を行うために、聞き手は「たとえば？」「何で？」等の切り返しをするようにさせる。	
終末 (10)	５、**授業全体を振り返っての感想**を書く。 ・思いやりは、ただ優しくするだけじゃなくて、本当に相手のことを想像して動くことだと思った。 ・どれだけ遠くに離れていても、ずっと会えなくても、心の奥でずっと思うことの大切さが分かった。源さんと一郎もこの手紙を通して、心の絆をより深めることができたと思う。自分も誰かとそんな関係になりたいと思う。	○思いやりについて考えた感想を書かせるために、最初と最後で自分の気持ちがどう変化したのか、それをこれからどうしたいかについて書かせるようにする。	思いやりについて深く考えることができた上で、目の前にいない他者に対しても思いやりをもった行動をとろうとしている。 （ワークシート）

地図のある手紙

宮川　ひろ

「どれ、よくぬくとまって出かけるか。」
源さんは、からだ半分を、いろりの中へのりだして、胸のあたりまで火を近づけた。
「このぶんじゃあ、きょう一日はふぶくだよ。もしも沼の原があっても、あしたらのばさっしゃい。おとうは、ほんに、ばかっ正直だから。」
おかねさんは、枯れたボヤをひざっこぞうの上でこまかく折っては、火の上に重ねた。
源さんは、膝の上までもある深い長ぐつを、いろりの中ではいた。ゴムがとけるほど足のうらまであったためた。スキー帽ですっかり顔もかくした。
「どれ、出かけるか。」
源さんは、去年で五十をすぎた。村の郵便局へ勤めて三十年余りになる。
吉野地区の受け持ちになってからでも、十年近くになるだろうか。この地域には沼の原がふくまれるので、若い人からは敬遠されて、交替してくれる者がいなかった。
沼の原は、吉野から三キロ近くも山の中へはいる。人家は十戸足らずの開拓村であった。
（こんな日には、正直、沼の原がねえと助かるがなあ・・・）
手紙の束をよりわけながら、源さんも思った。
やっぱり・・・一通だけ、沼の原があった。
源さんは、小さく舌うちした。

××県××郡××村吉野字沼の原
山上圭治様　きよ子様

「山上圭治・・・半年も前に死んじまっている人だがなあ・・・」
源さんは、そまつな茶封筒をうら返してみた。差出人の名前は、
東京都　江東区　・・・髙田様　山上一郎
「なんだと、一郎でねえか。」
源さんは、声をあげそうになった。もう一度、表を返してみると、あて名の下の方には、こまかい地図が書いてあった。源さんはめがねをかけて、たしかめるようにながめてみた。
なにごとかあったにちがいねえ・・・。
心のどこかでいつでも心配していたことが、とうとうおこってしまったような気がした。
地図のある手紙の受取人は、去年の夏、東京の地下鉄工事場で死んだ。事故死だった。おかあさんが病気でなくなったのは、もう二年前になる。それから沼の原の家をたたんで、一郎も東京でくらすようになった。ほっとする間もなく、圭治が死んだのだった。一郎は、前から夕刊だけをくばっていた新聞配達店にかわいがられて、手伝いながら学校へ通うという話だった。
一郎は六年生になっているはずである。
墓地へもっていったところで、死人が読めるわけもなし、・・・それを地図まで書いて、死んだ人の所へ持って行けって言うのだから・・・。
墓地は、沼の原の入り口にあった。そこまで届けたところで、死人が開いて読めるわけもなし、受取人のない手紙は、差出人に返すのがほんとうである。それでも、赤ん坊の時からだいてやっ

た一郎が書いてよこした手紙を、返すわけにはいかなかった。
一郎のやつ、源さんが配達する、って知ってのことなんだ・・・。
源さんは、はな水を手袋の甲でこすった。といって途中で開いて見るわけにもいかない。
吉野地区を配りおわると、時計は十一時近くになっていた。
いつもだったら、ここいらで一服させてもらうところだが、源さんの足は、沼の原の方へ向いて急いだ。
前にも後ろにも人影はない。ぎっし、ぎっしと雪をふむ音だけが聞こえる。
・・・このせつの子どもは、なりだけはでかくなっているが、十二や十三で他人さまのめしが、うんめえわけがねえ。何かがあって思いつめたにちがいねえ・・・死んじまった親に手紙を書くなんて、あいつも苦労してるださあ・・・。
源さんは、いつの間にか、スキー帽のあごのボタンをはずしていた。腰の手ぬぐいをひきぬくと、ひたいの汗と涙をいっしょにふいた。墓地はもうそこに見えていた。お墓といっても、墓石がたっているわけではない。お骨をうめた時に、うすっぺらなソトウバが、右の方にかしいだまま、雪の上に頭だけだしていた。
「圭治さんよ、おれがかわりに読むでなあ、ようく聞いててくれよ。」
源さんは、封をきった。
びんせんに二枚だけの、短い手紙だった。

とうちゃんとかあちゃん
東京も雪がつもりました。つもったといっても、ほんの十センチたらずなのに、みんなは大さわぎです。あぶなくて自転車は使えないので、肩からひもでかかえて配りました。
ぼくもだんだん受け持ちがふえて、毎朝二百けん配ってから、学校へいきます。
寒い日には、沼の原で、かあちゃんのつくってくれたおろしじんだが食いたくなります。そのことをおばさんに話したら、つくり方を教えろといいました。さけの頭を入れたみそしるの中へ、おろしぎわの大根おろしをたっぷり入れるだけだって話したら、さっそくつくってくれました。みんながおいしいっていったけれど、やっぱりかあちゃんがつくってくれた味とはちがっていました。でも、とってもうまかったです。
何か話したくなったら、また書きます。

さようなら

源さんは声をだして読んだ。読みながら、何度ものどをつまらせた。
・・・一郎のばかやろうめ、つまんねえものを食いたがって・・・ほんもののおろしじんだをくいにけえってこい・・・。手紙の上に落ちてくる雪はかわいているのに、ところどころインクがにじんで、ぼやけていた。